



「ひらほく新聞」で検索!

★感謝で継続11年半★

http://www.hirahoku.com/

☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

禍福一如

災いも幸せも表裏一体
心の持ちようで
いかようにも転じる
(大石順教尼の教え)

2月11日付特別号外にて、入江富美子監督のドキュメンタリー映画3作品の無料配信をご紹介しました。この度、東日本大震災から10年を迎えるこのタイミングで、改めてその感動作を有難く視聴させていただき、それぞれに与えられたいのち、そして、それぞれに違う使命について、あらためて深く考えさせられました。10年という節目とはいえ、復興はまだまだ道半ば。あらためまして亡くなられた方々に哀悼の意を表するとともに、御遺族の皆様にご心よりのお悔やみを申し上げます。今号では、映画からの学びを少しですがお届けいたします。明日からの生きる力の糧にしていだけましたら幸いです。

1/4の奇跡 〜本当のことだから

特別号外で感動溢れる詩をご紹介した難病MS(多発性硬化症)で亡くなった雪絵ちゃん。生前入院中、養護学校のかっこちゃんこと、山元加津子先生は「何かうれしくなるような話をして」という雪絵ちゃんに、前日見たという科学番組のお話をした。

昔、マラリアの伝染病が猛威を振ったアフリカの村のことを調べて分かった事実。それはマラリアが多く発生する地域では、ある一定割合で伝染病に強い突然変異遺伝子を持つ人がいるということ。そして、伝染病に強い遺伝子を持つ人が生まれる時、高い確率で、そのきょうだいに重い障害を持つ人が現れるという。その重い障害を持つ子どもの確率は4分の1。

「その約束が毎日、私の心を揺さぶり続けてくれるんです。かっこちゃん(山元先生)。以来、その「本当のこと」を映画と講演でずっと伝え続けてきた。

感謝が生んだ奇跡

入江監督の2作目の作品『光彩(ひかり)の奇跡』の主人公は、がんを克服後、今度は糖尿病で突然右目を失明、足の自由も奪われた寺田のり子さん、そして支えて共に歩んだ天使河原紫翠さん。5年の余命宣告も残り1年半、苦悩のなか、ふと目にしたかっこちゃんの講演会の案内。そして、雪絵ちゃんの詩に出会う。

かっこちゃんが朗読した雪絵ちゃんの「ありがたう」の詩を聴いて涙が止まらないのり子さん。

「人に喜んでもらえることをしなきゃいけないって思いついて、私は自分に対して感謝が足りなかった…。まずここから出発しなければ、人のために役立つことなんてとてもできないんじゃないかなって…。」

「ずっといじめていた、感謝がなくて本当にごめんなさい」と自分自身に手を合わせて心から詫言った。見えない目、動かない足にも最後にありがたうって感謝して頑張った雪絵ちゃん。同じような私にはまだ

1年半ある。こんな私にも何かできることがあるはず…。そして、これだけならできると手で描くパステル画に毎日夢中に向き合ってた。表現するのは、「光の絵」。雪絵ちゃんも伝えたかったであろう、どんな状況でも「ひかり」を忘れてはいけないということ。

無手の法悦

その後、のりさんは、天然塩による「塩絵」の開発、独自の色彩療法など、他機に活躍している。

入江監督作品3作目、『天から見れば』は、少年時代に父親の経営する木工所で機械のベルトに巻き込まれる不慮の事故で両手を失った南正文さんの物語。

「無手の法悦」とは、17歳の時、養父の狂乱により両腕を切り落とされたが、その絶望を乗り越え、画家との結婚、一児の出産、離婚などを経て、出家得度。身体障害者の救済に捧げた日本のマザー・テレサと言われた口筆画家、大石順教尼の感動の生涯を綴った書籍。「生まれ変わったもまた手のない私でありたい」という順教尼の生きざまに心をわしづかみにされた、と語る入江監督。

大石よね(順教)は、19歳の時、カナリヤが雛を育てるのを見て、口に筆をと

ることを思いつき、以後、独学で書画の勉強に励み、口で筆をとり見事な絵画・書を描くようになった。その晩年の順教尼のもとへ14歳で弟子入りした南正文さんは、口で筆をとる厳しい修行を続けた。

禍福一如

順教尼先生の「人の見えないところに、真心を尽くさない」という教えに従い、針金を使ってボタンをかけることを思いつき挑戦。数ヶ月毎日練習、数時間できるようになった。その後練習を続け、数分できるようになった。

その後南正文さんは、先生の勧めで様々な事に挑戦、いつしか少年時代の好奇心旺盛な心を取り戻していった。先生にとっても特別な弟子だったようである。

正文さんが弟子になって2年、昭和43年4月23日、順教尼は眠るように天に召された。奇しくもその日は、本人が普段からその日に死ぬんだと言っていた、かつて自分が両手を切られた日だった。

そして、口で日本画を描く画家として、ひたすら作品づくりに没頭した正文さんだが、順教尼の弟子という重圧、さらに持病による体調不良で筆が止まることもあった。しかし、それを乗り越えさせたのは、ご恩をかえさなければという強い思いだったと、精力的に

サポートを続けてきた奥さんの弥生さんは語る。今号のタイトル「禍福一如」とは、大石順教尼の教え。理不尽な環境を変えようとするのではなく、為せば成ると自分を変えながら歩み続けた順教尼先生。

人生に絶望して弟子になりたかった

人生に絶望して弟子になりたかったと言ってきた人に対し先生は、「あなたの両手を縛って過ごしてみなさい。自分の力ではどうすることもできない状態で暮らして、何の力によって私たちが生かされているかを突き止めなさい」と論じられた。

つきるところ、ご縁の大きな力に守られているという自覚こそが、順教尼先生のこうした内発力を湧き上がらせていたのであろう。

海外でも講演活動するなど多方面に活躍し、生涯約900点もの作品を残した南正文さんは、2012年12月、61歳で永眠。

☆何か身体に不自由なところがありますか? 自分ができることは? 東日本大震災から10年。あらためて、命を生かされている自身の使命に向き合います。☆感動映画3作品、どちらかの上映会にて、またはネット配信にてぜひどうぞ。

コロナ禍の学び

2011年の東日本大震災のとき、東京では計画停電が行われた。そして、社会全体が滞って、スーパーやコンビニから食材が一気になくなった。

私のクライアントに、都内で中華料理店を営む店長がいた。首都圏が落ち着いた4月中旬、私はその店に足を運んだ。どこの飲食店も売上は落ちていたので、この人の店も例外ではないだろう。内心そう思いながら、私は彼にこう尋ねた。「この震災で、どういう影響がありましたか？」

すると、こんな興味深い話を聞くことができた。この人の店のスタッフはほとんど中国人で、ほぼ全員が本国に帰ってしまったという。ところが、これまで下っ端扱いされていた一番若いスタッフが1人だけ残った。そして、こんな意外なことを言ったそうだ。「こんなときだからこそ、あたたかい食事で地元の人たちを元気づけましょう。今は利益のことは考えず、残った僕たちだけで何とか店をまわしましょう」。

店長は驚いたが、すぐに納得した。「それもそうだな、ただでさえ世の中が不安なんだ。この利益は度外視して、今いるスタッフと今ある材

料だけでやっていく」。そして停電の中、店にろうそくを立て、何事もなかったかのように営業を再開させたという。店のスタッフがいつもの調子で営業しているの、この店に来たお客さんたちは大きな安心感を得たことだろう。

その話を聞いて、私はピンときた。すぐに経理の人に、「震災後1ヶ月間の売上が見たいので、売上日報を見せてほしい」と頼んだ。そして、私の予想通りこの店の売上は前年の売上を超えていた。

「梯谷さん、聞いてください。震災が起きたことで、自分が想像もしていなかったような変化が店に起こったんですよ。まず、ふだんは偉そうにしているのにいざというときに逃げてしまふような幹部がすべていなくなりました。その結果、今まで幹部の影に隠れていた一人のスタッフがメキメキと頭角を現し始めたんです。彼は、「こんなときだからこそ通常通りの営業をしましょう」と他のスタッフたちを説得してまわってくれました。今では、彼が立派な幹部ですよ。つまり震災のおかげで、うちの店は本当にやる気のある人だけ残ってもらうことができました。僕は、そんなふうに見えるようになったんです」

「なるほど」と私は思った。つまり、この人は「この経験は、自分にとって悪いことだけではなかった。本当は、何らかの気づきをもたらすために起きた」と解釈を付け直したわけである。そして、そういう人のところには、本当にお客さんも戻ってくる。

不幸な出来事、災いに対して当事者は誰しも受け入れられるのが難しい。それでも立ち止まり、その現実から逃げずに向き合う。どんな出来事にも、意味があるといわれる。「これは、自分にとって何の意味があるのか」「そこにはどんな学びがあるのか」そう問い続けること。

コロナ前にはもう戻ることとはできない。その大きな変化を受け入れる。そして、そこから「よかった」を見つけて自ら新しい時代、新しい自分をつくっていく。

「人生とダンスをしよう！」。型にはまったダンスをするのではなく、起こる出来事とダンスをしていく。つまり、相手（現実）が動きを変えたら、こちらもそれに合わせてダンスを続けていく。梯谷さんは、今こそガラリと現実を、そして人生を変える絶好のチャンスだという。

『突き抜ける 無意識の法則』 梯谷幸司著より

いのちのつながり

自分の両親、二組の祖母、その親たち……。何十代、何百代、今の自分へとつながっている奇跡。宇宙の始まりから、このいのちはずっと途切れずに続いている。数え切れないご先祖様の誰一人欠けても自分は存在しない。自分の身体の中にたくさんのご先祖様のDNAが刻み込まれている。ご先祖様を悲しませるようなことをしてはいけない。喜んでもらえるような行動をしていく。

コロナ禍で放送開始が遅れた今年のNHK大河ドラマ『青天を衝け』は、「日本資本主義の父」とも称される渋沢栄一。その幼少期の物語でのワンシーン、栄一に対して、右手を左胸に当ててこう伝える母親。「人は生まれてきたその時から一人じゃないんだよ。いろんなものとながつてるんだよ。ココ（左胸）の奥底だつて分かってんだよ、一人じゃないことを。ココに聞きな。それが本当に正しいか、正しくないか。あんたが嬉しいだけじゃなく、みんなが嬉しいのが一番なんだよ」

一人が幸せじゃなくて、みんなが幸せなのが一番ということ。自分の儲けたいからこうするのではなく、この人が儲けるとよって町全体が儲けてみんなが幸せになれる。この母の教えがその後の栄一の原点だという。

亡くなって長い時を経て、私たちにその大事な教えを伝え続け、ココ（左胸）に生き続けている「いのち」がある。それは、誰もが知る偉人たちがばかりではない。それぞれの胸に、それぞれに違う「いのち」が生き続けている。あなたにとって思い浮かぶ「いのち」は誰だろうか。

大石順教尼と死刑執行前に面会した義父、萬次郎は地獄へ落ちて、草葉の陰からずっと見守ると告げた。順教尼は萬次郎を決して恨まず赦した。萬次郎、順教尼、南正文さん、その「いのち」はつながった。

雪絵ちゃんや順教尼、南正文さんの「いのち」も新たに有難くココに刻もう。私たちは誰しも必ず死を迎える。だからこそ、目の前の今、自分の使命にあらためて向き合ってほしい。生きたくても生きられない、死にたくさんの命、そのすざましい魂が今を生きる私たちを後押ししている。その多くの命を背負っている「覚悟」と、未来の私たちの笑顔へつなぐ「責任」を、ココに刻んで全力で。

気仙沼市立階上中学校の卒業式における卒業生代表 梶原裕太君の答辞

本日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙行していただき、ありがとうございます。ちょうど十日前の三月十二日。春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通い慣れたこの学舎を、五十七名揃って巣立つはずでした。

前日の十一日。一足早く渡された思いのたけと詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こるとも知らずに……。

階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪ってしまいました。天が与えた試練というには、むずかしいものでした。つらくて、悔しくてたまりません。

時計の針は十四時四十六分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。

命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。

私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。

後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとoshんで過ごしてください。先生方、親身のご指導、ありがとうございます。先生方が、いかに私たちを思ってくれていたか、今になってよく分かります。地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございます。

これからはもういっしょに願っています。お父さん、お母さん、家族の皆さん、これから私たちが歩んでいく姿を見守ってください。必ず、よき社会人になります。私は、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。最後に、本当に、本当に、ありがとうございます。

平成二十三年三月二十一日 卒業生代表 梶原裕太